

茨城県教育財団文化財調査報告第358集

しん ほり ひがし  
新堀東遺跡

一般国道354号土浦バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県土浦土木事務所  
財団法人茨城県教育財団



調査区全景（南側上空から）



第1号掘跡土層断面

## 序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

その一環として整備される一般国道 354 号土浦バイパス整備事業は、幅員狭小区間の解消や土浦市街地の渋滞緩和及び土浦北 IC のアクセス向上を図る上で極めて重要な役割を果たすものです。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である新堀東遺跡が存在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県土浦土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成 22 年 4 月から 5 月までの 2 か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、新堀東遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県土浦土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年 3 月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 鈴木 欣 一

# 例 言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 22 年度に発掘調査を実施した茨城県土浦市手野町字新堀 3997 番地の 3 ほかに所在する新堀東遺跡しんぼりひがしの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 22 年 4 月 1 日～5 月 31 日  
整理 平成 23 年 8 月 1 日～9 月 30 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 仲村浩一郎  
主任調査員 小川貴行  
調査員 松林秀和
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、主任調査員小川貴行が担当した。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 10,800 \text{ m}$ 、 $Y = + 37,640 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 竪穴住居跡

遺物 Q - 石器 T - 瓦 TP - 拓本記録土器

土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 500 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉

 繊維土器断面

 道路跡硬化面 (地山)

 道路跡硬化面 (構築土)

● 土器

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。計測値の単位は m, cm, kg, g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
新堀東遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
竪穴住居跡	10
2 中世・近世の遺構と遺物	11
(1) 堀跡	11
(2) 溝跡	14
(3) 道路跡	15
3 その他の遺構と遺物	18
遺構外出土遺物	18
第4節 まとめ	20
写真図版	
抄 録	

# 新堀東遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

新堀東遺跡は、土浦市の東部に位置し、霞ヶ浦の土浦入り北岸、標高 26 m ほどの舌状台地基部に立地しています。一般国道 354 号土浦バイパス整備事業工事とともに、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 22 年度に発掘調査を行いました。



## 調査の内容

道路の拡張部分となる 937m<sup>2</sup>を調査しました。調査の結果、縄文時代前期中葉（約 5,500 年前）の竪穴住居跡 1 軒、中世（500 年前）の城館である手野城に関連する施設と考えられる堀跡 1 条、溝跡 1 条、中世・近世の道路跡 2 条を確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、陶器（小坏）、石器（鏃）、瓦（棧瓦）です。



断面形が V 字状（薬研堀）の第 1 号堀跡



天明元年に建てられた道標



地形測量をするスタッフ



土橋が確認できた第1号溝跡



踏みしめられた道路跡

## 調査の結果

今回の調査で確認できた堀跡は、最大幅が9 mにも及ぶ薬研堀です。両端が調査区域外に延びていることから、発掘調査を行ったのは長さ11 mほどです。その痕跡は、平行する土塁状の高まりとともに、北側と南側の谷津頭<sup>やつがら</sup>を直線状に結んでいます。舌状台地の基部を掘り切り、台地の通行を遮断して、外敵の侵入を防ぐことを目的に構築されたものと考えられます。当遺跡の西方約2 kmの舌状台地先端部には、中世の城館である手野城跡があり、城の防御施設として構築されたと考えられます。

このような堀跡や土塁は、阿見町の「戦国土塁」や茨城町の「小幡城周辺の堀切」など県内でも調査例が増加しています。当遺跡の堀跡も、当地の領主であった小田氏やその家臣で手野城の城主とされる中根氏が、戦国末期、佐竹氏の南下政策に対する備えとして、構築した可能性があります。



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県土浦土木事務所は、土浦市において一般国道354号土浦バイパスの整備事業を進めている。

平成18年11月13日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道354号土浦バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成18年11月27日に現地踏査を、平成21年5月8日に試掘調査を実施し、新堀東遺跡の所在を確認した。平成21年10月2日、茨城県教育委員会教育長は茨城県土浦土木事務所長あてに、事業地内に新堀東遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成21年11月4日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成21年12月10日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県土浦土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

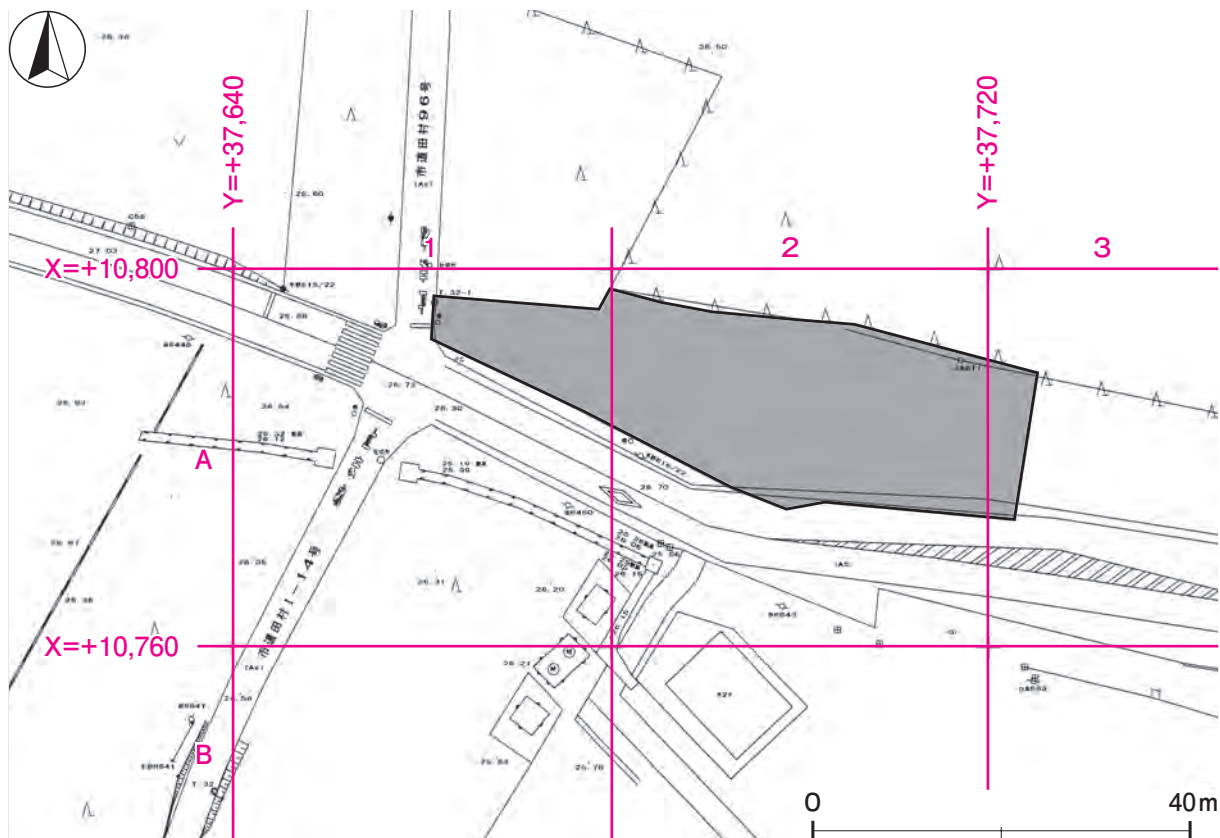
平成22年1月6日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道354号土浦バイパス整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年2月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県土浦土木事務所長あてに、新堀東遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査業務について委託を受け、平成22年4月1日から5月31日まで発掘調査を実施した。

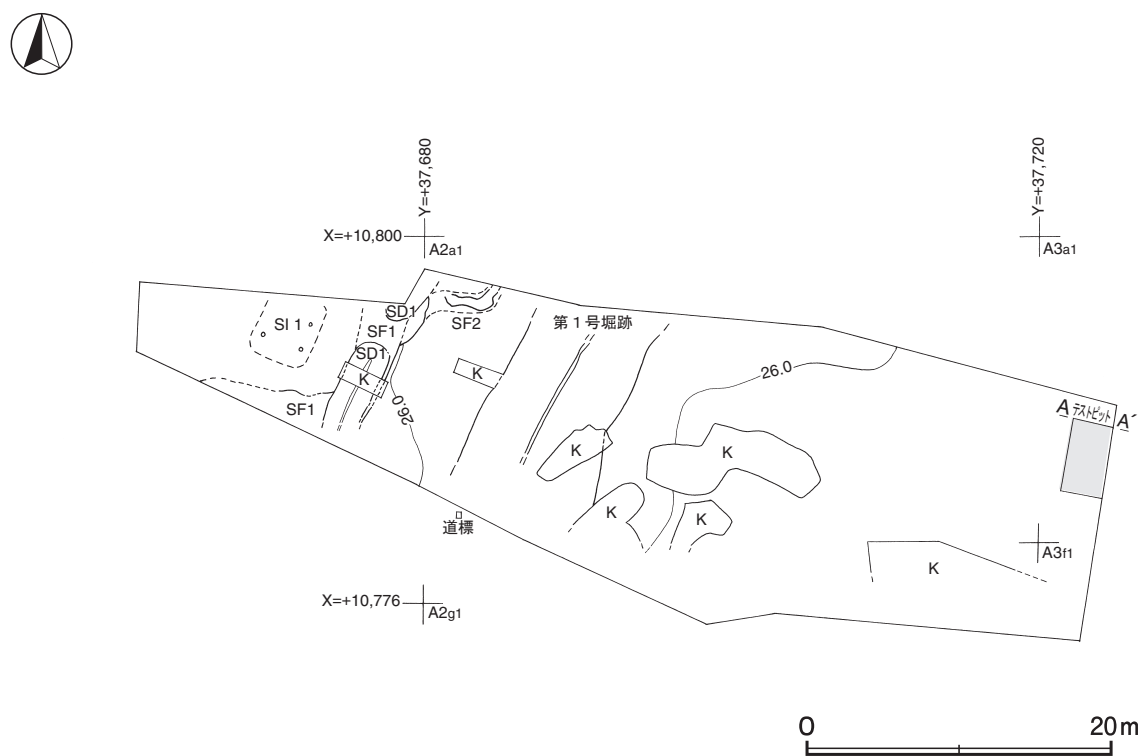
## 第2節 調査経過

新堀東遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程	期間	
	4月	5月
調査準備 表土除去 遺構確認		
遺構調査	[Progress bar spanning from early April to mid-May]	
遺物洗浄 注記 写真整理	[Progress bar spanning from early April to mid-May]	
補足調査 撤収		[Small progress bar in May]



第1図 新堀東遺跡調査区設定図（遺跡測量図から作成）



第2図 新堀東遺跡遺構全体図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

新堀東遺跡は、茨城県土浦市手野町字新堀 3997 番地の 3 ほかの所に所在している。

遺跡が所在する土浦市は、茨城県南地域のほぼ中央部に位置している。土浦市の地形は、中央部を桜川が南東流し霞ヶ浦に注ぎ、桜川低地を形成している。台地は桜川低地によって二分されており、北側は新治台地、南側は筑波・稲敷台地と呼ばれ、標高 20～40 m である。

土浦市の東部からかすみがうら市にかけて、霞ヶ浦の土浦入りと高浜入りに挟まれた半島状を成す新治台地は、筑波山塊の東方から延びる洪積台地である。台地は中小河川の浸食作用によって、複雑に入り組んだ谷津や低地で形成されている。台地上は畑地や山林として利用され、霞ヶ浦に面した広大な低地は蓮田として利用されている。

新治台地の地質は、成田層と呼ばれる海成砂層及び礫層が主体をなし、その上に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらに関東ローム層が堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は、土浦入り北岸の新治台地南部、標高約 26 m の台地上に立地している。舌状台地基部の狭隘部に位置し、北側及び南側には谷津頭が延びてきている。調査区は遺跡の北西端部にあたり、調査前の現況は荒蕪地である。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡が所在する土浦入り北岸の台地上は、数多くの遺跡が点在しており、古来から生活の適地であったことがうかがえる。ここでは、当遺跡と関連する縄文時代、中世の遺跡を中心に概要を記述する。

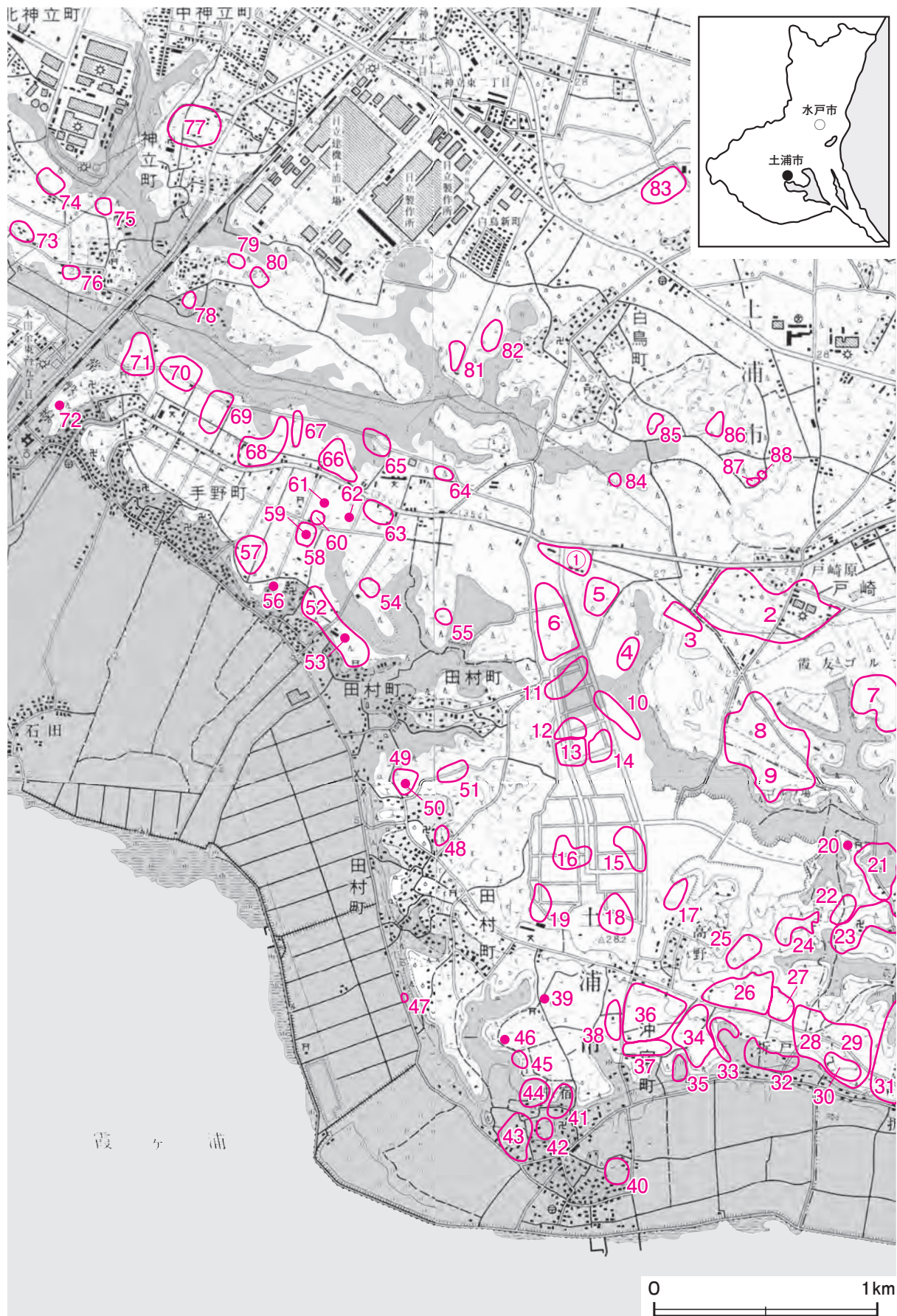
旧石器時代の遺跡は、下郷遺跡<sup>1)</sup>〈52〉から安山岩を主体とした石器集中地点と焼土跡が確認されている。スクレイパー、細石刃を含む 233 点の石器が出土しており、炉を伴う石器製作跡と考えられている。

縄文時代の遺跡数は、飛躍的に増加している。早期の遺跡として井草式又は夏鳥式の撚糸文系土器が出土しているのは長峯遺跡<sup>2)</sup>〈10〉、ゴリン山遺跡<sup>3)</sup>〈65〉、壺杯清水西遺跡<sup>4)</sup>〈4〉、下郷遺跡などである。この他にゴリン山遺跡、下郷遺跡では、沈線文系土器や条痕文系土器も出土している。この頃から気温の温暖化が進み、海進が顕著となる。

前期には海進もピークに達し、上昇した海面は現在より約 3～4 m 高かったと想定されている。当時の霞ヶ浦や北浦一帯は太平洋とつながる内海であったと考えられている。早期以降、遺跡数は増加傾向にあり、前期の集落跡が複数の遺跡で確認されている。黒浜式期を主体とする当該期の住居跡は、下郷遺跡で 33 軒、戸崎中山遺跡<sup>5)</sup>〈29〉で 18 軒、壺杯清水西遺跡で 12 軒、前谷遺跡群<sup>6)</sup>（前谷西遺跡〈12〉、東原遺跡〈13〉）で 3 軒が確認されている。さらに、前谷遺跡群からは、当該期のものと考えられる完形の板状土偶が採集されている。

中期の遺跡は、前谷遺跡群で阿玉台式期の住居跡 3 軒、八幡脇遺跡<sup>7)</sup>〈18〉で加曾利 EⅢ・EⅣ式期の住居跡 6 軒が確認されている。また、中・後期には海退現象が進むが、霞ヶ浦の海退の進行は遅く、海水が漂う状態が長く続いた様で、沖宿貝塚<sup>8)</sup>（上縄貝塚）〈39〉では、当該期の土器の他に鹹水種のハマグリやサルボウが出土している。





第3図 新堀東遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「常陸藤沢」「常陸高浜」「土浦」「木原」)



表1 新堀東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代								
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世		
①	新堀東遺跡		○					○	○	45	宮西B遺跡	○	○			○	○	○	
2	柳沢2遺跡		○					○	○	46	宮西貝塚		○					○	
3	寿行地北遺跡	○	○			○			○	47	天王松遺跡						○	○	
4	壺杯清水西遺跡	○	○	○	○	○				48	後久保遺跡					○	○	○	
5	申橋遺跡		○							49	八幡梶内遺跡		○			○		○	
6	三夜原東遺跡		○					○		50	八幡梶内貝塚							○	
7	柳沢1遺跡	○	○						○	51	平畑遺跡		○			○			
8	養老田遺跡(かすみから市)		○			○	○	○	○	52	下郷遺跡	○	○	○	○	○	○		
9	養老田遺跡(土浦市)	○	○					○	○	53	下郷貝塚		○						
10	長峯遺跡		○					○		54	田村向原遺跡		○						
11	寺畑遺跡	○	○			○	○			55	清水遺跡		○						
12	前谷西遺跡	○	○					○		56	寺上一字一石経塚							○	
13	東原遺跡	○	○					○		57	手野天神遺跡		○			○	○	○	
14	前谷東遺跡	○	○					○		58	宿後遺跡						○	○	
15	六十塚遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	59	宿後貝塚							○	
16	石橋北遺跡	○	○					○		60	井戸山遺跡							○	○
17	尻替遺跡		○			○	○	○	○	61	八坂東貝塚							○	
18	八幡脇遺跡		○			○	○			62	天王場貝塚							○	
19	石橋南遺跡		○			○	○			63	手野原口遺跡		○			○	○		
20	八幡神社古墳		○			○			○	64	真木ノ内遺跡		○			○		○	
21	戸崎出戸遺跡							○	○	65	ゴリン山遺跡		○						○
22	寺後遺跡		○						○	66	富士塚遺跡		○			○	○		
23	松学寺遺跡					○			○	67	原の内遺跡		○			○			
24	正久保遺跡					○			○	68	薬師遺跡		○			○	○		
25	出金遺跡					○	○	○		69	弁ノ内遺跡		○	○		○	○		
26	三島遺跡					○	○	○		70	大儘遺跡		○	○	○	○			
27	三島東遺跡		○			○	○	○	○	71	五斗落遺跡		○	○	○	○			
28	原山西遺跡		○					○	○	72	手野城址							○	
29	戸崎中山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	73	中道遺跡		○			○	○		
30	戸崎古墳群			○	○				○	74	松山遺跡		○			○		○	
31	戸崎城跡		○			○	○	○	○	75	青木遺跡		○			○			
32	観正堂遺跡					○	○	○	○	76	花輪遺跡		○						
33	鷺内遺跡					○	○	○		77	神立遺跡		○			○	○	○	
34	小山台遺跡					○	○	○		78	榎下遺跡		○						
35	沖宿薬師遺跡								○	79	根本西遺跡		○			○			
36	入ノ上A遺跡	○	○	○	○	○	○	○		80	根本東遺跡		○						
37	入ノ上B遺跡		○			○	○	○		81	中台西遺跡		○						
38	小森遺跡		○							82	中台遺跡		○						
39	沖宿貝塚(上縄貝塚)		○							83	壹貫砂遺跡		○			○			
40	沖宿堀の内館跡								○	84	南辺遺跡		○			○			
41	久保内遺跡							○	○	85	勿火遺跡		○						
42	海蔵寺遺跡								○	86	向楽遺跡		○						
43	坂本遺跡					○	○	○		87	八幡遺跡		○						
44	西妻遺跡					○	○	○		88	下ノ山遺跡		○						

※ここでは、主として縄文時代前期及び中世の遺跡を抽出し、掲載している。

後期の遺跡は、土浦市遺跡調査会によって行われた当遺跡の調査で、堀之内式期の土坑1基が確認されているのみで<sup>9)</sup>、晩期に至っては、壺杯清水西遺跡で安行式土器が数点出土しているに過ぎず、急激に遺跡の数が減少している。

弥生時代以降も、六十塚遺跡<sup>10)</sup>〈15〉や下郷遺跡で弥生時代後期の集落跡、戸崎中山遺跡や下郷遺跡、八幡脇遺跡で古墳時代前期、石橋南遺跡<sup>11)</sup>〈19〉で古墳時代後期の集落跡がそれぞれ確認されており、断続的ながら当地は人々の生活の場であったことがうかがえる。

奈良・平安時代の当地は、茨城郡大津郷に比定されており、寺畑遺跡<sup>12)</sup>〈11〉や長峯遺跡で平安時代の寺院跡が確認されている。また、長峯遺跡からは、「国厨」と墨書された土器が出土しており、国衙との関連が考えられる。石橋北遺跡<sup>13)</sup>〈16〉からは、竪穴住居跡とほぼ同数の52棟もの掘立柱建物跡が確認され、三彩陶器の他、灰釉陶器が多数出土しており、当地は物資の集積地で大津郷の中心的地域として想定されている<sup>12)</sup>。

中世には、手野城<sup>14)</sup>〈72〉、戸崎城<sup>15)</sup>〈31〉、木田余城、宍倉城などの小田氏関連の城館が築かれており、当遺跡から西方約2kmの舌状台地の先端部には、手野城跡が所在している。手野城は、戦国時代に小田氏の重臣中根氏の居城となるが、史料が少なく詳細については不明な点が多い<sup>13)</sup>。この他、当該期の遺跡として、下郷遺跡は五輪塔の集石と墓坑と考えられる土坑群が確認されており、墓域と想定されている。戸崎中山遺跡でも、溝跡から多数の五輪塔が出土し、36基の墓坑が確認されている。入ノ上遺跡<sup>16)</sup>〈入ノ上A遺跡〈36〉、入ノ上B遺跡〈37〉〉では馬の埋葬土坑7基が確認されており、当地の古称である「南野牧」との関連が想定されている<sup>14)</sup>。また、井戸山遺跡<sup>17)</sup>〈60〉では、15世紀後半～16世紀の大形井戸跡が確認されている<sup>15)</sup>。

戦国時代になると、佐竹氏の勢力が当地にも及ぶようになり、1573（天正元）年に戸崎城、宍倉城が落城し、佐竹氏の配下の城となったが、佐竹氏が秋田に移封後は廃城となった。木田余城も1578（天正6）年に佐竹氏によって落城し、破脚されている。近世においては、当地は土浦藩領となっている<sup>16)</sup>。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第3図の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) a 平石尚和「一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 下郷古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第167集 2000年3月  
b 関口満・窪田恵一「下郷遺跡・下郷古墳群 佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」2001年7月
- 2) 小松葉子・福田礼子・黒澤春彦・窪田恵一「長峯遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書3」土浦市教育委員会 1997年3月
- 3) 柴正・中根節男「霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 五斗落遺跡・大盛遺跡・弁ノ内遺跡・原ノ内遺跡・ゴリン山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第43集 1987年3月
- 4) 関口満・黒澤春彦・駒澤悦郎「三夜原東遺跡 新堀東遺跡 壺杯清水西遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1」土浦市教育委員会 1997年3月
- 5) 小竹茂美・浦和敏郎「戸崎中山遺跡 霞ヶ浦環境センター（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第218集 2004年3月
- 6) 関口満・福田礼子・吉澤悟・窪田恵一「前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）・東原観音塚 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書4」土浦市教育委員会 1998年3月
- 7) 塩谷修・小松葉子・黒澤春彦・吉澤悟・吉田匠・関口満「八幡脇遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 第8集」土浦市教育委員会 2009年3月
- 8) 茨城県教育委員会『重要遺跡調査報告書I』1977年3月
- 9) 註4)に同じ
- 10) 小川和博・大淵淳志・鍛冶文博「六十塚遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書9」土浦市教育委員会 1997年3月
- 11) 小松葉子・黒澤春彦・関口満・吉澤悟「石橋南遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書7」土浦市教育委員会 1997年3月
- 12) 黒澤春彦「32 田村・沖宿遺跡群」『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県 1995年3月
- 13) 土浦市史編さん委員会『土浦市史』土浦市史刊行会 1975年11月
- 14) 窪田恵一・黒田友紀・黒澤春彦「茨城県土浦市 入ノ上遺跡 都市計画道路田村沖宿線道路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」土浦市教育委員会 1997年8月
- 15) 関口満・橋場君男「井戸山遺跡確認調査報告書」土浦市教育委員会 1991年3月
- 16) 註13)に同じ

参考文献

- 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 土浦』1982年12月  
茂木雅博編『土浦の遺跡 -埋蔵文化財包蔵地-』土浦市教育委員会 1984年3月  
土浦市史編さん委員会『図説 土浦の歴史』土浦市教育委員会 1991年3月  
茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月  
黒澤春彦「田村沖宿遺跡群と入ノ上遺跡」『茨城の考古学散歩』茨城県考古学協会 2010年5月

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

新堀東遺跡は、土浦市の東部に位置し、霞ヶ浦の土浦入り北岸、新治台地南部の舌状台地基部に立地している。調査面積は937㎡で、調査前の現況は荒蕪地である。調査区は遺跡の北西端部にあたり、遺跡の範囲は、調査区の南東側の台地上に延びている。

調査の結果、竪穴住居跡1軒（縄文時代）、堀跡1条（中世）、溝跡1条（中世）、道路跡2条（中世以降）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、陶器（小坏）、石器（鏃）、瓦（棧瓦）などである。

## 第2節 基本層序

調査区東部（A3d1区）にテストピットを設定し、地表面から深さ2.3mまで掘り下げて基本層序（第4図）の確認を行った。土層は7層に分層でき、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する表土層である。ロームブロックを少量含み、粘性は普通で、締まりは弱い。層厚は4～20cmである。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。ロームブロックを少量、黒色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は8～24cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。黒色粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は12～36cmである。

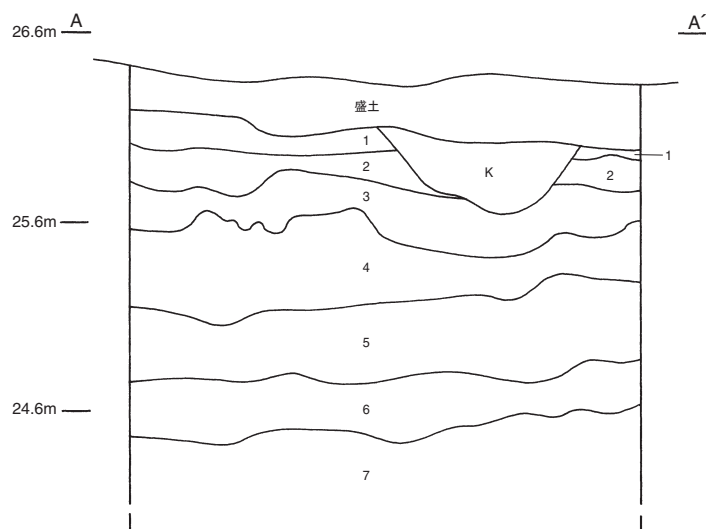
第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は20～61cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。赤色粒子を微量に含み、粘性は普通で、締まりは極めて強い。層厚は28～56cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは極めて強い。層厚は17～34cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりは極めて強い。層厚は未掘のため、不明である。

遺構は、第3層の上面で確認できた。



第4図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

#### 第1号住居跡（第5・6図）

**位置** 調査区西部のA 1 b8区、標高26mの台地上に位置している。

**確認状況** 遺構確認中に遺物の集中地点があり、周囲を精査したところ、床面の一部と柱穴が確認できた。

**規模と形状** 床面は、部分的にしか確認できなかった。ピットの配置から、一辺4mほどの方形又は長方形と推定できる。北側の調査区壁面の土層観察では、掘り込みが確認でき、壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は9cmである。

**床** わずかに凹む床が、中央部に遺存している。特に硬化した部分は認められなかった。

**ピット** 3か所。P1～P3は深さ12～28cmで、規模にややばらつきはあるが、配置から柱穴と考えられる。

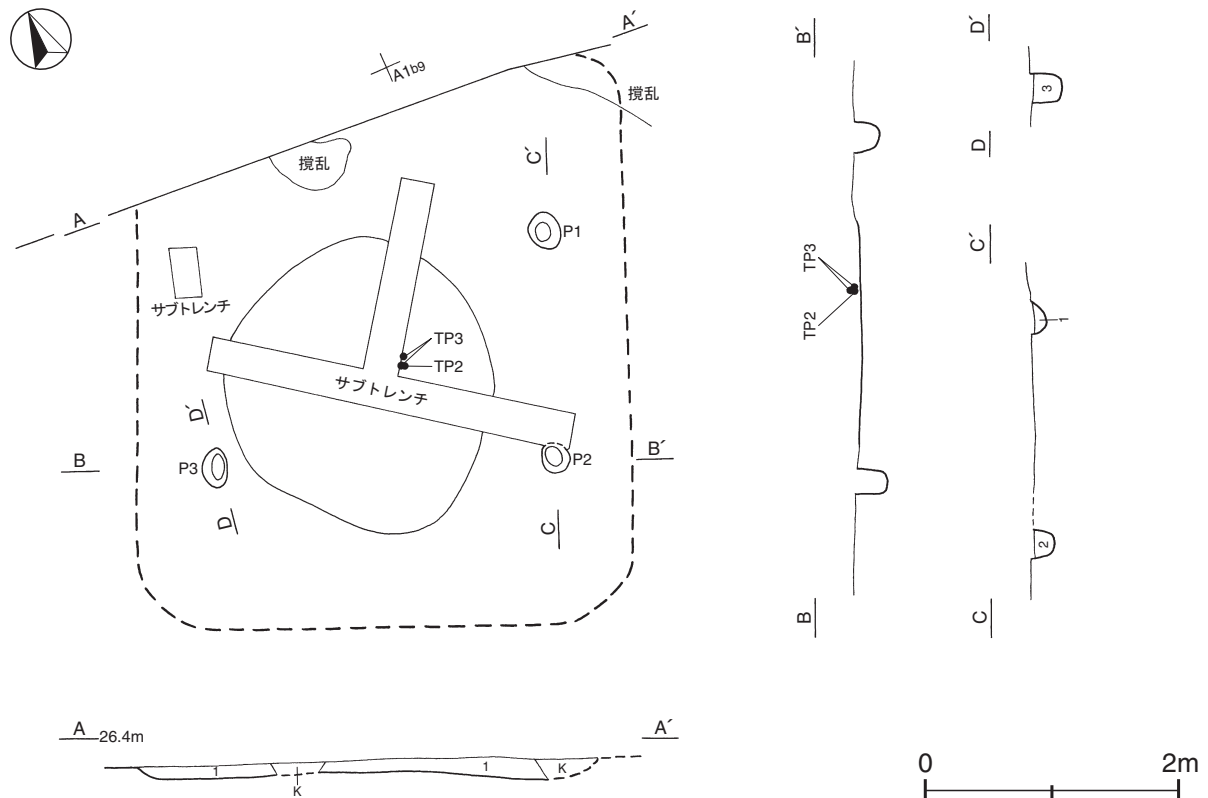
**ピット土層解説（各ピット共通）**

- |       |         |      |           |
|-------|---------|------|-----------|
| 1 明褐色 | ローム粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 |      |           |

**覆土** 単一層である。堆積状況は不明である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

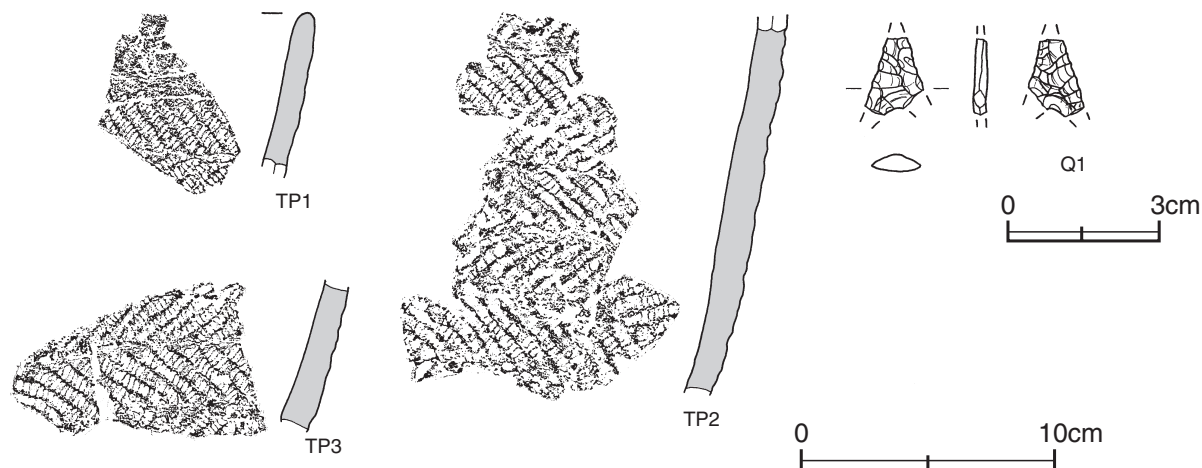


第5図 第1号住居跡実測図



**遺物出土状況** 縄文土器片 13 点、石器 1 点（鏃）が、覆土下層から散在して出土している。TP 2・TP 3 は中央部の覆土下層から、TP 1・Q 1 は覆土中から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から前期中葉（黒浜式期）と考えられる。TP 1～TP 3 は接合しないが、胎土や文様構成から同一個体と考えられる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	0段多条の単節縄文による羽状縄文	覆土中	PL 4
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	0段多条の単節縄文による羽状縄文	覆土下層	PL 4
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	0段多条の単節縄文による羽状縄文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	鏃	(15)	(1.1)	0.3	(0.5)	チャート	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	覆土中	PL 4

## 2 中世・近世の遺構と遺物

当時代の遺構は、堀跡 1 条、溝跡 1 条、道路跡 2 条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

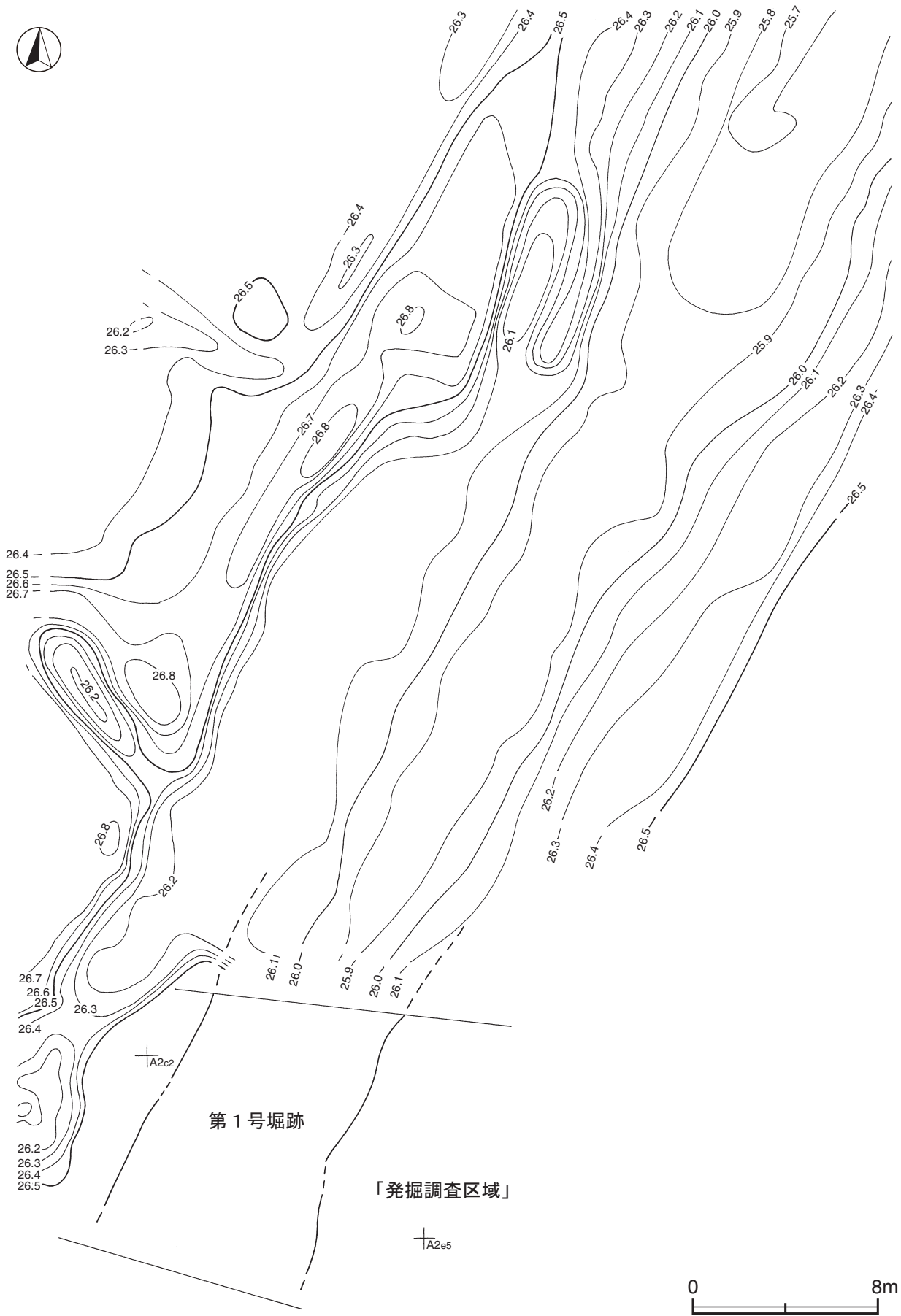
### (1) 堀跡

#### 第1号堀跡（第7・8図）

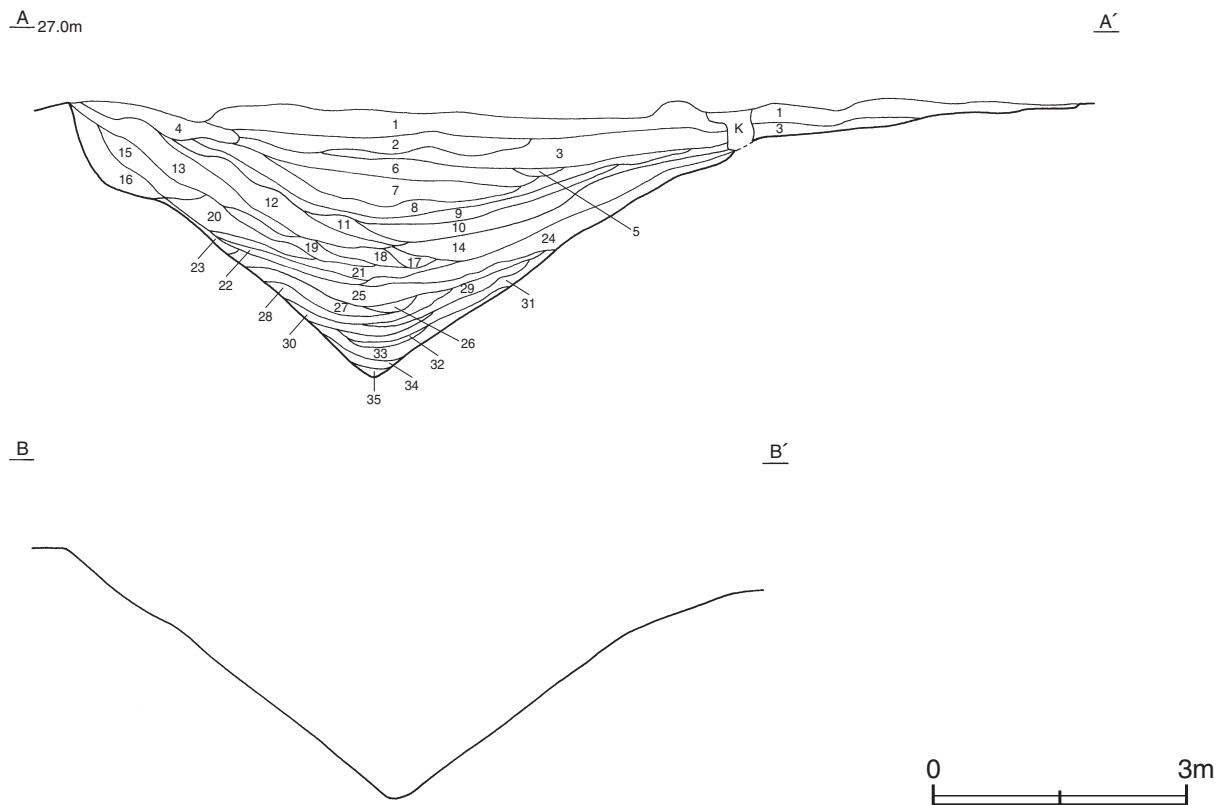
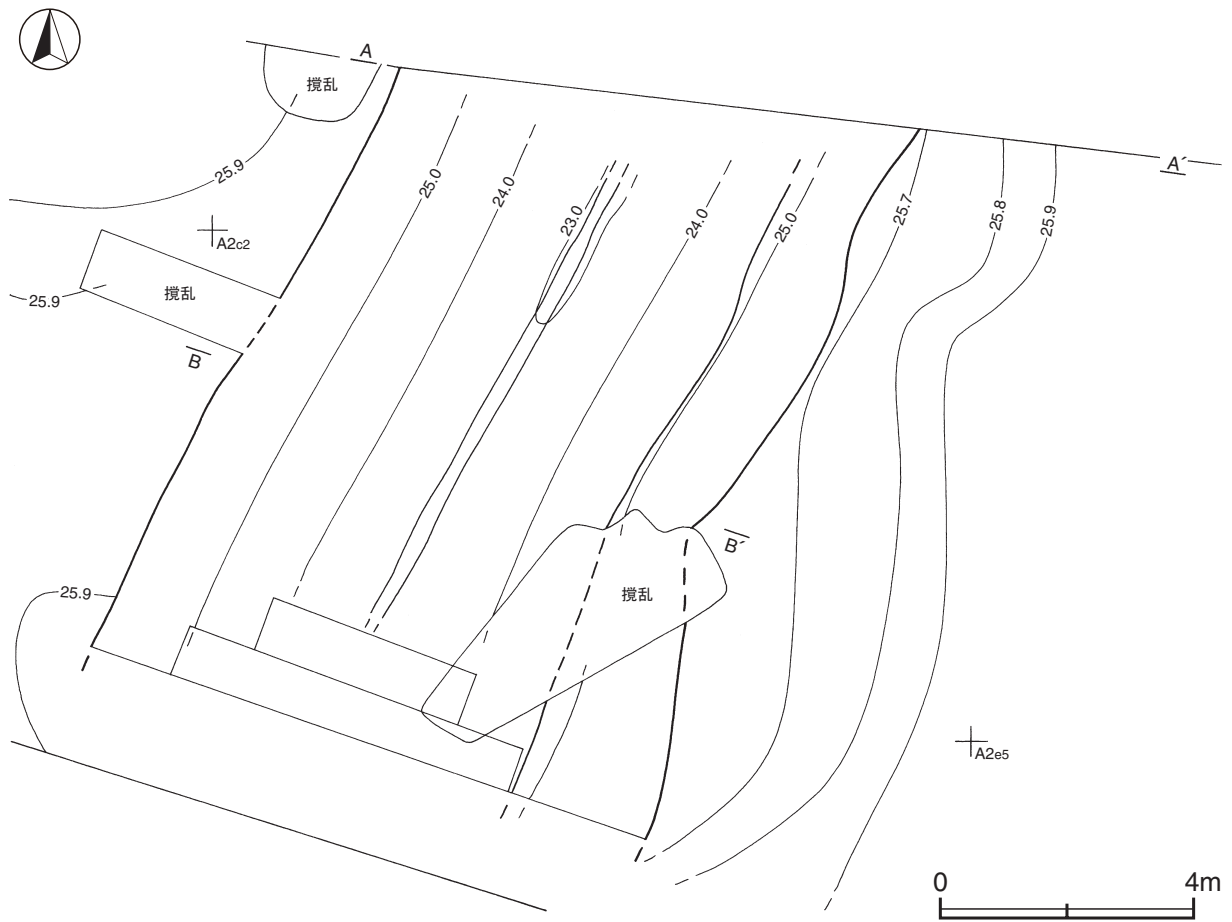
**位置** 調査区中央部の A 2b4 区～A 2d1 区、標高 26 m の台地上に位置している。

**規模と形状** 両端が調査区域外に延びているため、確認できた長さは 11.48 m である。北東方向(N - 29° - E)へ直線状に延びている。上幅は最大 9.20 m、下幅は最大 0.32 m、深さは確認面から 2.90 m である。断面形は薬研状であり、法面の勾配は 31～40 度である。底面に近い法面からは、幅 20cm 前後の工具痕と考えられる凹みが等間隔に確認されている。

**覆土** 35 層に分層できる。中層の第 17～22 層は、黒（暗）褐色土がブロック状に堆積しており、埋め戻されている。同様に、上層の第 4 層もブロック状の堆積状況から埋め戻されている。他の層は、各層にローム土が含まれているが、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第7図 第1号掘跡現況図



第8図 第1号堀跡実測図

#### 土層解説

1	褐色	ロームブロック、粘土ブロック・黒色ブロック微量	19	黒褐色	ローム粒子多量
2	褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量	20	黒褐色	ローム粒子・黒色粒子中量
3	暗褐色	ロームブロック・黒色粒子少量	21	暗褐色	ローム粒子多量
4	褐色	ロームブロック少量、黒色粒子微量	22	黒褐色	ロームブロック・黒色粒子少量
5	黒褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量	23	にぶい褐色	ロームブロック中量
6	暗褐色	ロームブロック中量	24	暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量
7	黒褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量	25	褐色	ロームブロック多量、黒色ブロック微量
8	暗褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量	26	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子中量、黒色粒子少量
9	褐色	ローム粒子多量	27	褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量
10	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・黒色粒子微量	28	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・黒色粒子微量
11	灰褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量	29	褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量、粘土粒子微量
12	褐色	ロームブロック中量、黒色粒子微量	30	にぶい褐色	ローム粒子中量、黒色ブロック微量
13	暗褐色	ロームブロック多量、黒色粒子少量	31	明褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量、粘土粒子微量
14	暗褐色	ローム粒子多量、黒色粒子少量	32	にぶい褐色	ローム粒子多量、粘土粒子中量、黒色粒子少量
15	褐色	ロームブロック・黒色粒子微量	33	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量、黒色ブロック微量
16	極暗褐色	ロームブロック・黒色粒子微量	34	灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・黒色粒子少量
17	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・黒色粒子微量	35	にぶい褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、黒色粒子微量
18	黒褐色	ローム粒子中量			

**遺物出土状況** 流れ込みによる縄文土器片2点が出土している。

**所見** 時期は、伴う遺物がないため明確でないが、規模や薬研堀の形状から中世の城郭関連施設と考えられる。掘り直しや掘り浅いの痕跡は認められず、一過性の堀と考えられる。調査区の北側には、本跡から延びる堀の痕跡が認められ（第7図）、谷津に向かって直線状に延びており、舌状台地の基部を掘り切るように構築されている。当遺跡から西方約2kmの舌状台地先端部には、中世の城郭である手野城跡が存在し、当遺構は立地から手野城に伴う施設の一部と想定できる。

#### (2) 溝跡

##### 第1号溝跡（第9図）

**位置** 調査区西部のA1a1区～A1d9区、標高26mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 土橋を挟んで両端が調査区域外に延びており、確認できた長さは北側が2.96m、南側は5.80mである。北東方向（N-25°-E）へ直線状に延びている。上部は第1号道路に掘り込まれており、確認できた上幅は最大2.40mで、下幅は最大0.20m、深さは確認面から1.28mである。断面形は薬研状であり、法面の勾配は上位で34～41度、下位は傾斜度が高くなり58～63度である。

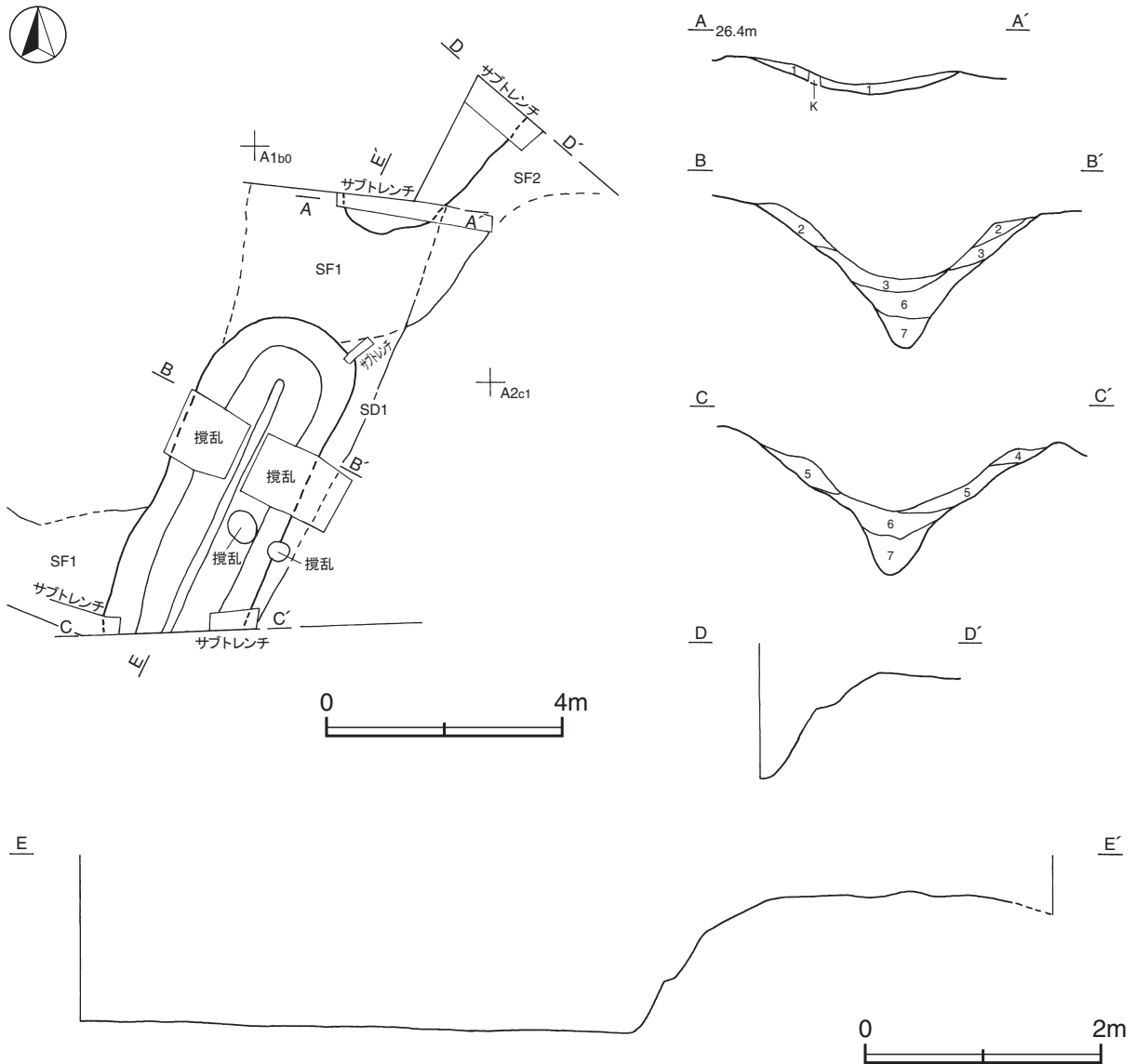
**覆土** 7層に分層できる。各層にロームブロックが含まれており、不均質な堆積状況から埋め戻されている。

#### 土層解説

1	極暗褐色	ロームブロック中量	5	暗褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック少量	6	暗褐色	ロームブロック中量
3	黒褐色	ロームブロック中量	7	暗褐色	ロームブロック多量、黒色粒子微量
4	極暗褐色	ロームブロック少量			

**所見** 時期は、遺物が出土していないため明確でないが、規模や薬研堀の形状から中世の城郭関連施設と考えられる。第1号堀跡と走行方向がほぼ平行し、形状も類似していることから、時期差はあまりないものと考えられるが、同時期に機能していたか否かは不明である。第1号堀跡と同様に、当遺構も立地から手野城に伴う施設の一部と想定できる。





第9図 第1号溝跡実測図

(3) 道路跡

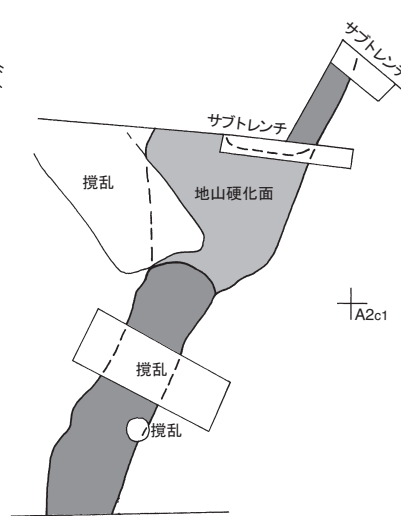
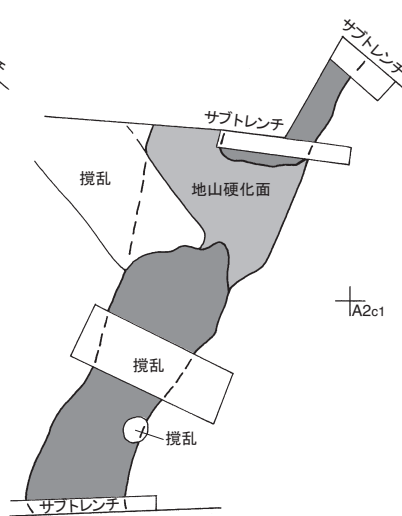
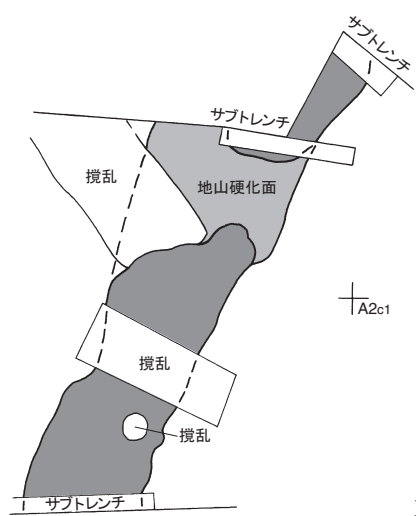
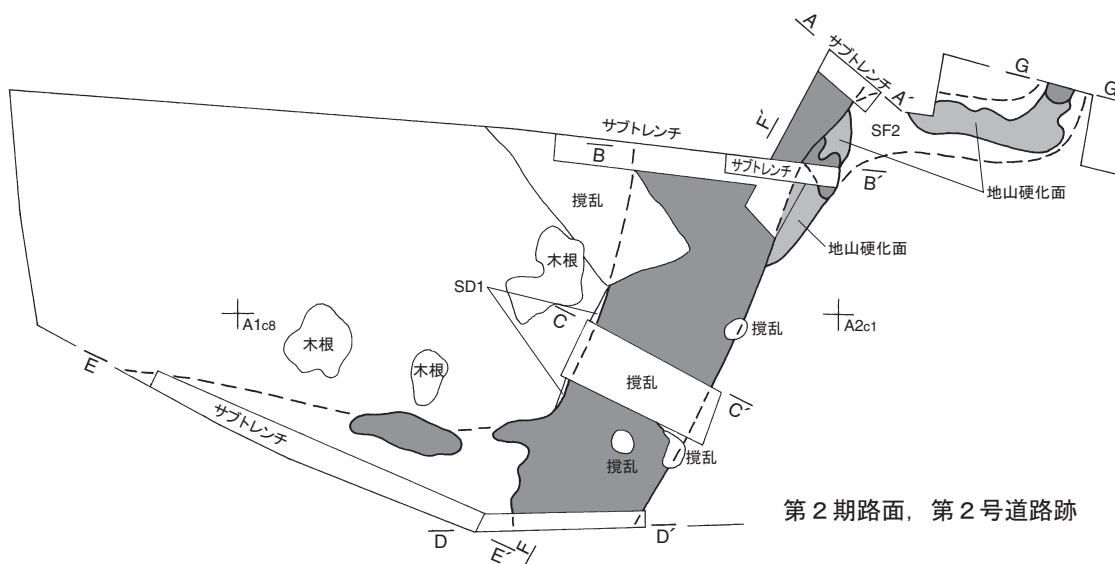
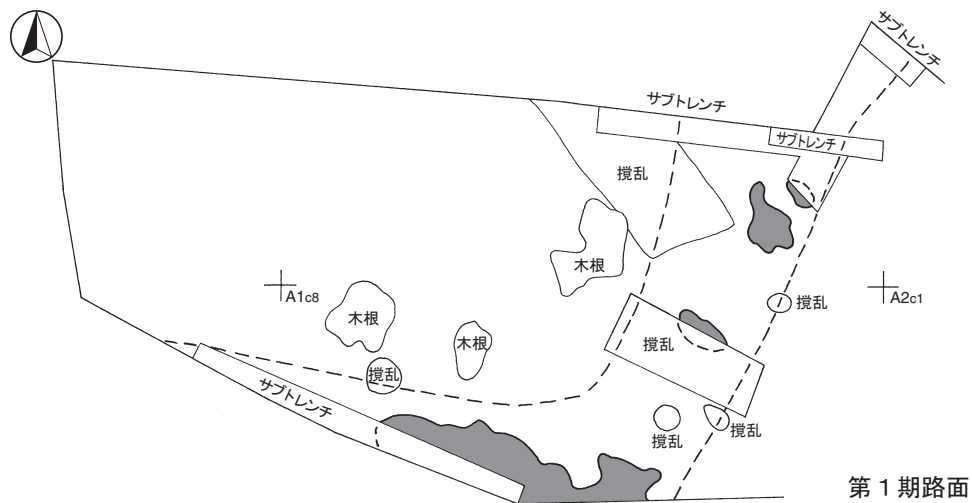
第1号道路跡 (第10・11図)

本跡は、調査区の西部で確認し、両端が調査区域外に延びている。土層観察から5時期に区分でき、ここでは最初に確認できた面を第1期路面とし、以下確認順に第2・3・4・5期路面と時期の新しい順に呼称する。なお、第1期路面の構築土は、土層観察からさらに2時期に細分が可能であるが、依存状態が不良のため平面的な区分ができず、ここでは一括して第1期路面と呼称する。

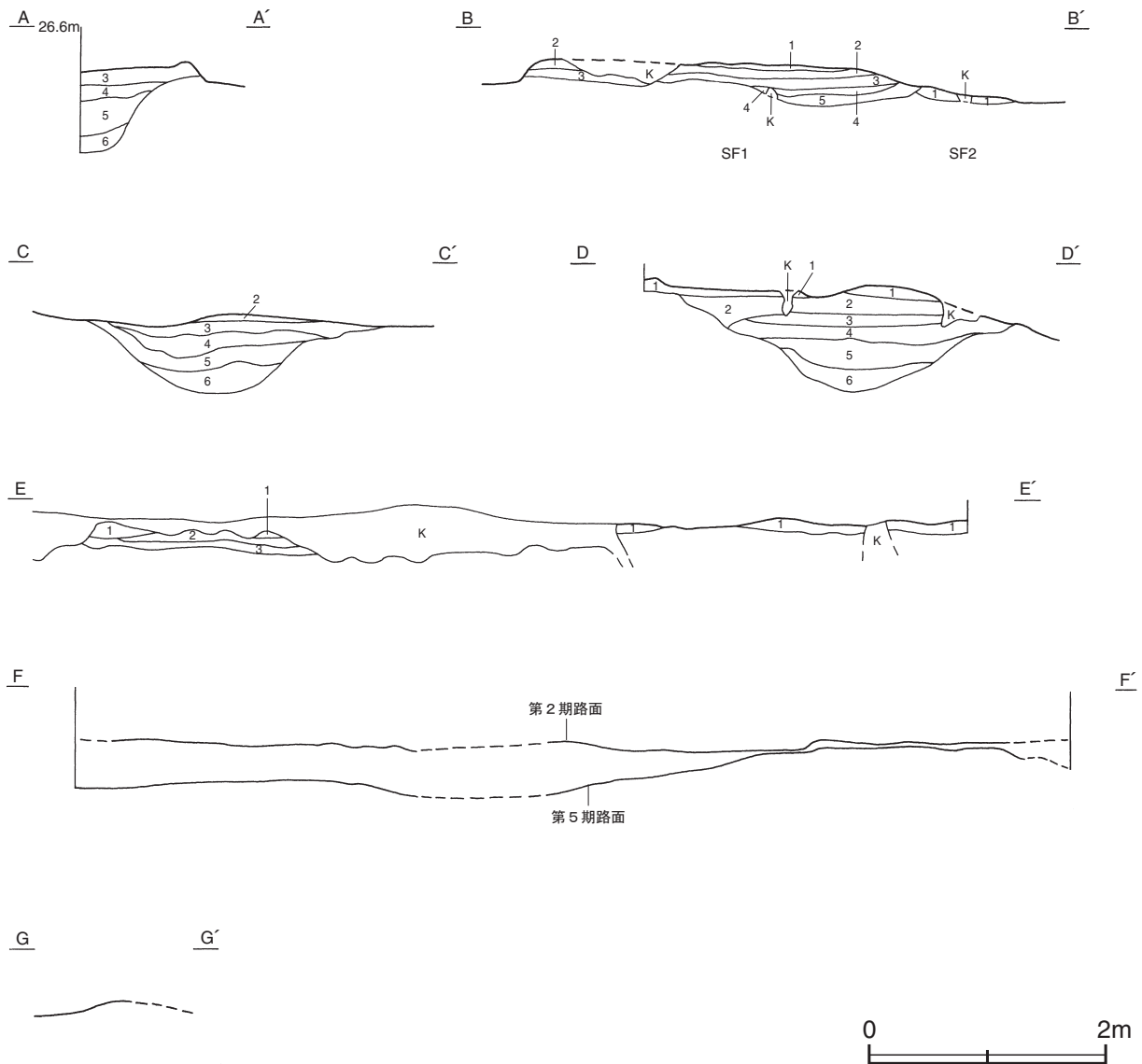
**位置** 調査区西部のA 1 a0区～A 1 c8区、標高26mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号溝跡及び第2号道路跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 第1・2期路面は、A 1 c9区で北東方向(N - 22° - E)と北西方向(N - 83° - W)に延びており、L字状である。第3～5期路面は、北東方向(N - 22° - E)へ直線状に延びている。両端が調査区域外に延びているため、確認できた長さは、第1期路面が北東方向へ1.28m、北西方向へ5.70m、第2期路面が北東



第10図 第1・2号道路跡実測図(1)



第11図 第1・2号道路跡実測図(2)

方向へ10.20 m, 北西方向へ6.60 m, 第3～5期路面が北東方向へ10.20 mである。最大幅は, 第1期路面で1.38 m, 第2～5期路面で2.72 mである。掘方は溝状で, 深さは確認面から68cmである。

**構築土** 6層に分層できる。第1号溝跡の覆土を掘り込み, 黒褐色を主体とした土を埋土している。各層とも締まりは極めて強い。土層観察から5時期に区分することができる。第1・2層上面が第1期路面, 第3層上面が第2期路面, 第4層上面が第3期路面, 第5層上面が第4期路面, 第6層上面が第5期路面である。

**土層解説**

- |        |                         |       |                      |
|--------|-------------------------|-------|----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・暗褐色ブロック微量       | 4 黒褐色 | 黒褐色ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色  | ロームブロック・黒褐色ブロック微量       | 5 黒褐色 | 黒褐色ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色  | ロームブロック・黒褐色ブロック少量, 鉄分微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 黒褐色ブロック微量 |

**遺物出土状況** 混入した縄文土器片1点, 土師器片1点, 須恵器片1点が出土している。

**所見** 時期は, 伴う遺物がないため明確でないが, 重複関係から中世以降と考えられる。第1号溝が廃絶後に埋め戻され, 浅くなった溝跡を利用して道路が構築されたものと考えられる。

## 第2号道路跡（第10・11図）

**位置** 調査区西部のA 2a2区～A 1b0区、標高26mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 第1号道路に掘り込まれており、全容は不明であるが、クランク状に屈曲して北側の調査区域外に延びている。確認できた長さは、東西方向へ3.20m、南北方向へ3.48mで、最大幅0.88mである。掘方は溝状で、深さ10cmである。

**構築土** 単一層で、締まりは極めて強い。

### 土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量

**所見** 時期は、出土遺物がないため明確でないが、重複関係から中世以降と考えられる。クランク状に屈曲した本跡の南西側は、第1号溝跡の土橋方向に延びており（第9図）、両遺構は同時期に機能していた可能性があるが、土橋を挟んだ西側の調査区域は植栽による攪乱が著しく、同方向への広がり確認できなかった。

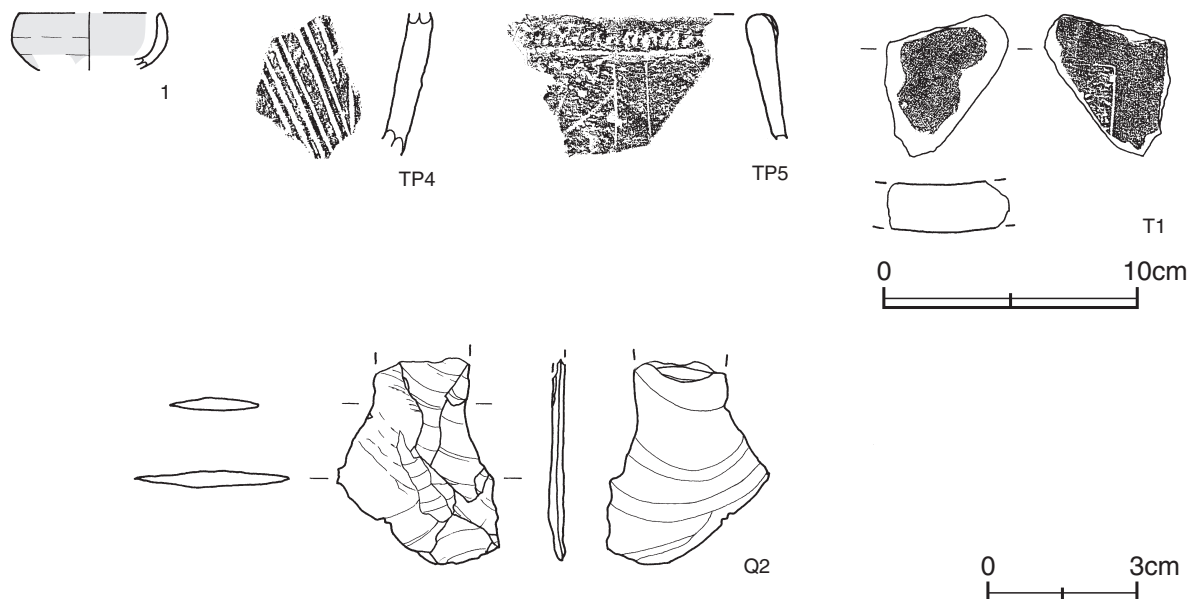
表2 中世・近世の道路跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	規模			底面	主な出土遺物	時期	備考 重複関係（古→新）
				長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)				
1	A 1a0～A 1c8	N - 22° - E N - 83° - W	L字状 直線状	北東方向 (1.28/10.20) 北西方向 (5.70/6.60)	1.38 2.72	68	溝状	縄文土器, 土師器 須恵器	中世以降	SD 1, SF 2→本跡
2	A 2a2～A 1b0	-	クランク状	東西方向 (3.20) 南北方向 (3.48)	(0.88)	10	溝状	-	中世以降	本跡→SF 1

## 3 その他の遺構と遺物

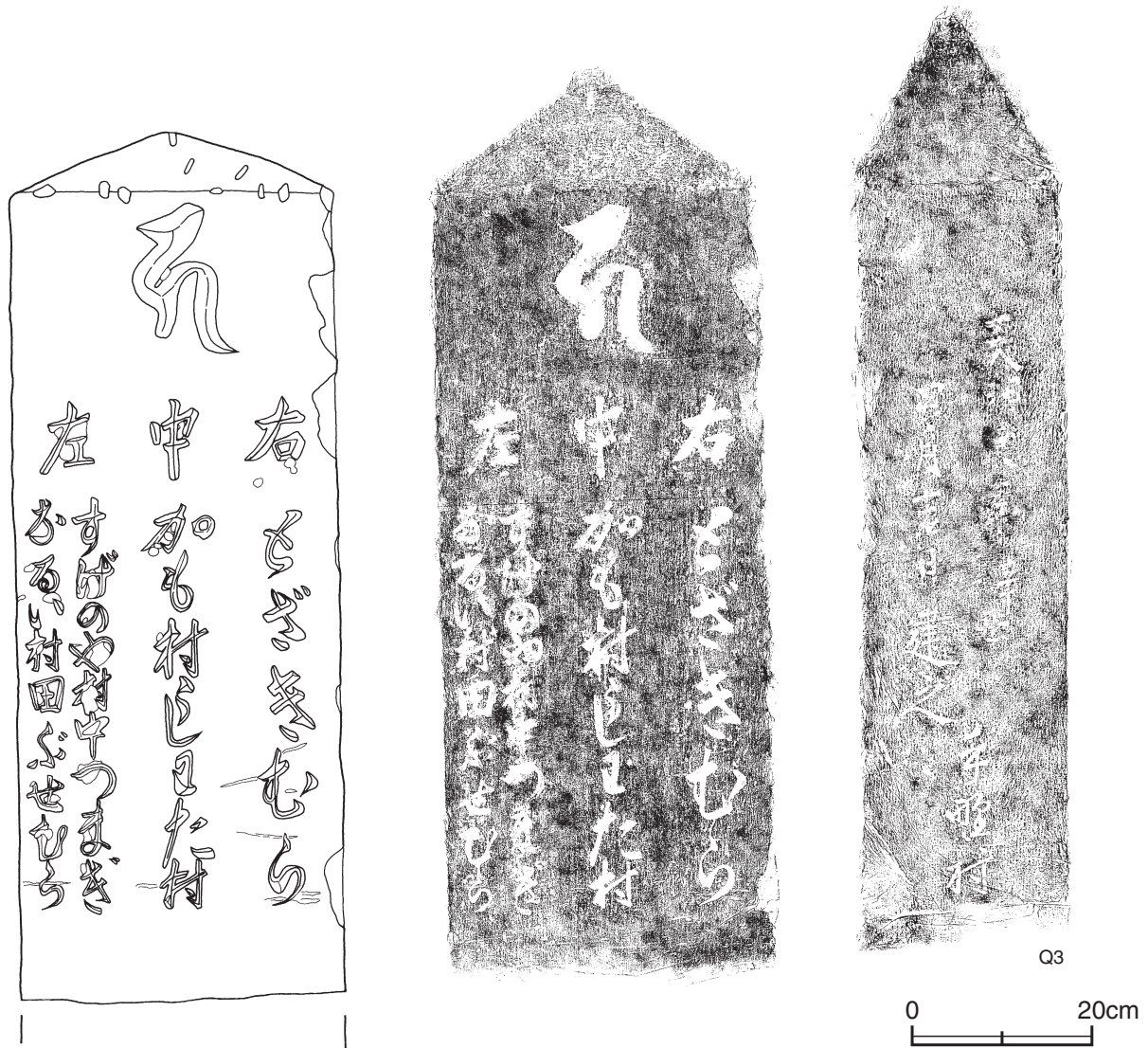
### 遺構外出土遺物（第12・13図）

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。なお、Q 3の道標は、調査区の南側に隣接して設置されていたもので（第2図）、本事業に伴い移設が予定されている。



第12図 遺構外出土遺物実測図（1）





第13図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第12・13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・施釉	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	陶器	小坏	[5.8]	(2.3)	-	緻密 長石釉	灰白	良好	内・外面施釉	表採	20% PL 4

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	地文に縄文施文 半截竹管による集合沈線	表採	PL 4
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	紐線文 縦位2条の沈線施文	表採	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	剥片	(4.1)	3.3	0.3	(3.7)	硬質頁岩	縦長剥片 打面欠損 背面に複数方向からの剥離痕	確認面	PL 4
Q 3	道標	(96.5)	36.3	22.5	-	緑色凝灰岩	正面 種子地藏菩薩 右とどきむら 中加も村うしわた村 左すげのや村中つまぎなるい村 おぶせむら 右側面 天明元年辛丑四月吉日建之 手野村	調査区南側	PL 4

番号	種別	器種	長さ	幅	瓦厚	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 1	瓦	棧瓦	(5.7)	(5.1)	1.9	長石・石英	灰	良好	「茨城縣カ」刻印	表採	

## 第4節 ま と め

今回の調査で、縄文時代前期中葉の住居跡1軒、中世の堀跡1条、溝跡1条、中世以降の道路跡2条を確認した。ここでは、中世の城郭関連施設と考えられる第1号堀跡を中心に、調査の成果を記述する。

### 1 縄文時代

第1号住居跡から出土したTP1～TP3の文様は、単節縄文による羽状縄文である。0段多条によるRLの単節縄文とLRの単節縄文のそれぞれ別原体を使用して、羽状を構成している。また、胎土には繊維が含まれるなど、これらの土器は、文様や胎土の特徴から縄文時代前期中葉の黒浜式土器と考えられ、本住居跡はこの時期に帰属するものである。当該期を主体とする前期の住居跡は、当遺跡から南東方向約300mに位置する壺杯清水西遺跡<sup>1)</sup>で12軒、下郷遺跡<sup>2)</sup>で33軒、戸崎中山遺跡<sup>3)</sup>で18軒、前谷遺跡群<sup>4)</sup>で3軒が確認されており、入り組んだ谷津に面する台地上から、数多くの集落跡が確認されている(第3・14図)。前期は海進もピークに達し、平野部の奥深くまで海水が進入した時期であり、内海であった霞ヶ浦から延びる谷津に面した台地上は、生活の適地であったことがうかがえる。

土浦市遺跡調査会によって行われた当遺跡の調査では、後期と考えられる土坑3基、焼土跡2基、ピット5基が確認されている<sup>5)</sup>。このうち、第1号土坑から後期前葉の堀之内式土器が出土している。今回の調査区では、当該期の遺構は確認されなかったが、堀之内式土器1点(TP4)が表土から採集されており、今回の調査区周辺まで遺構が広がっている可能性があることを付け加えておきたい。

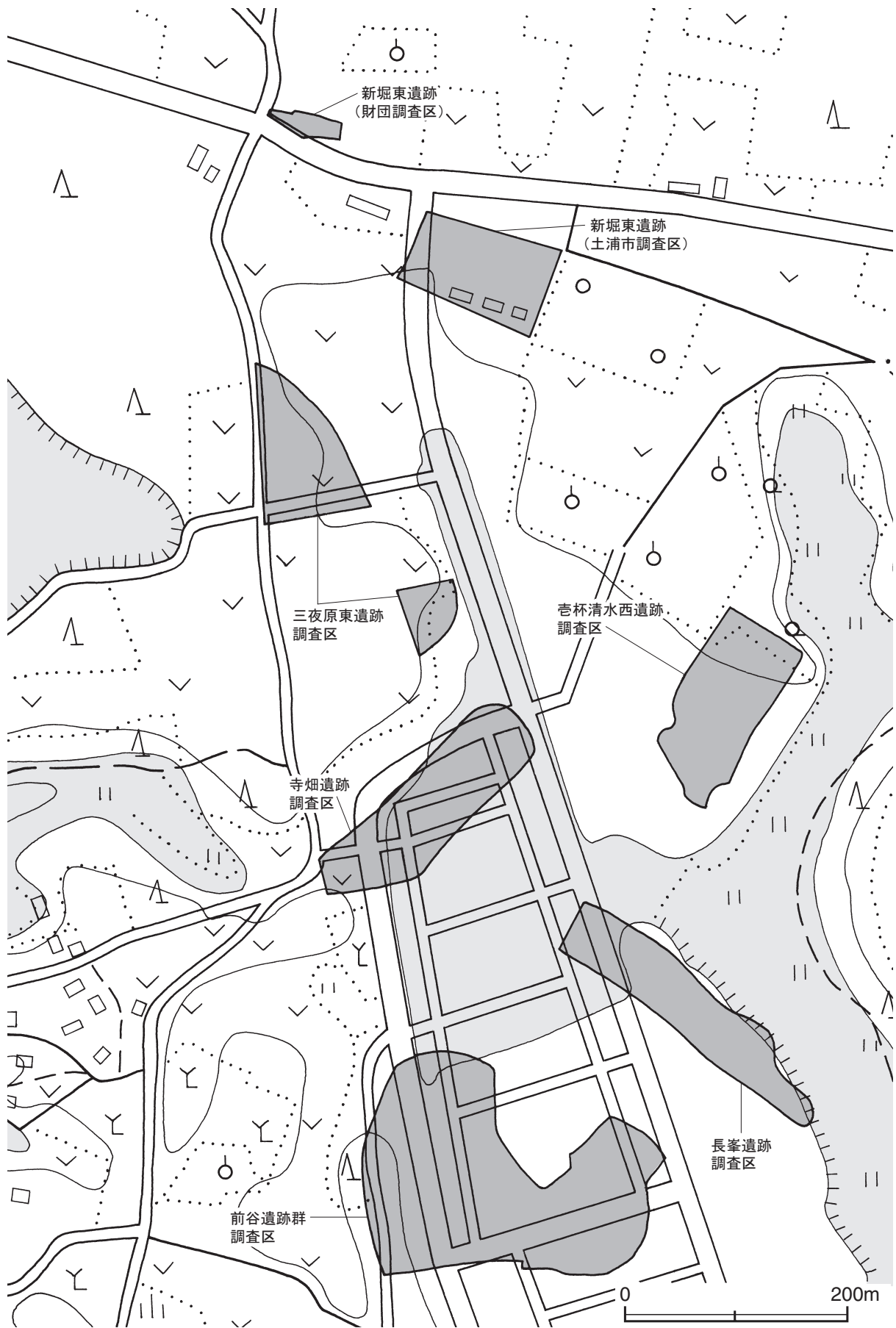
### 2 中世・近世

当時代の遺構として、堀跡1条、溝跡1条、道路跡2条を確認した。

調査区中央部から確認できた第1号堀跡は、最大幅が9mとなる薬研堀である。両端が調査区域外に延びており、今回の調査で確認できた長さは11mほどであるが、北東方向に直線状に延びる堀跡の全長は、600mにも及ぶものと推定される。当遺跡は舌状台地基部の狭隘部に位置しており、北側及び南側には谷津頭が延びてきている。堀跡は南北の谷津頭を結び、舌状台地の基部を掘り切るように構築されている。当遺跡から西方約2kmの舌状台地先端部には、中世の城館である手野城跡が存在し、当遺構も規模や形状、立地の点から手野城に伴う城郭関連施設と想定される(第15・16図)。

当遺跡の堀跡のように、二つの谷津頭を土塁や堀で結ぶことで、台地上の通行を遮断して外敵の侵入を防いだと考えられる施設は、県内でも調査事例が近年増えつつある。阿見町から江戸崎方面にかけての台地上には「戦国土塁」と呼ばれる土塁や堀跡が約30か所存在している。これらの遺構について、大竹房雄氏は江戸崎城を居城とした土岐氏が、街道閉鎖や城・砦・集落の防御を目的として戦国時代(天文末～天正期)に構築した可能性が強いとしている<sup>6)</sup>。また、阿見町に所在する二重堀遺跡では、平行する土塁3条と堀跡2条が調査されているが、時期決定ができる遺物が出土しておらず、時期は調査区内から出土した遺物や他の遺跡の類似遺構から16世紀代と考えられている<sup>7)</sup>。

茨城町に所在する小幡城跡の北側にも同様な遺構があり、前新堀遺跡と前新堀B遺跡のそれぞれの遺跡から、堀跡とそれに付随する土塁が確認されている。出土遺物が少ないため、時期を限定することは難しいが、小幡城の関連から16世紀代の遺構と考えられている<sup>8)</sup>。



第 14 図 周辺遺跡の調査区 (国土地理院 25,000 分の 1「常陸高浜」から作成)



これら台地上の通行を遮断するために構築されたと考えられる堀跡や土塁は、従来の城域とされる範囲から一定の距離があり、城館との関連を証明することは難しい。史料として残ることは少ないが、「小川照明城園部公由来記」によれば、小川城（園部城・小美玉市）を居城とする園部氏が、行方の小高勢に対する備えとして、1568（永禄11）年に新堀を構えたとの記載がある<sup>9)</sup>。堀が構築されたと考えられている場所は、城跡の北方700mの地点であり、現在堀切を確認することはできないが、「新堀」地名が残っている<sup>10)</sup>。

こうした「新堀」地名に石崎勝三郎氏は注目し、古地図や航空写真を基に、現存遺構について詳細な分析を行っている。その結果、「新堀」地名について、城館を普請した後に、必要に迫られて新たに普請した「新たな堀」が地名として残ったのではないかと結論づけている。また、石崎氏は当遺跡についても現況を確認しており、国道354号線を挟んで北側には堀跡と土塁が、南側には土塁が存在することを言及している<sup>11)</sup>。今回の調査区では土塁は確認できなかったが、調査区北側の地形測量では、石崎氏の指摘の通り、堀跡の西側に土塁状の高まりが確認できた（第7図）。本来は、堀跡に土塁が平行して存在していたと考えるのが、防御施設としては自然であろう。

最後に第1号堀跡の時期と構築者について検討してみる。伴う遺物が出土していないため、時期を限定することは難しいが、当遺構と関連が想定される手野城とその周辺諸城を巡る状況を確認することで、時期を検討したい。手野城に関しての史料は少なく詳細も不明な点が多いが、戦国時代には小田氏の重臣である中根氏の居城であったと伝えられている。弘治・永禄年間（1555～1570年）の頃になると、佐竹氏と小田氏の対立姿勢が強まり、小田氏も居城である小田城から土浦城に退去せざるを得ない状況がしばしば起こるようになった。1564（永禄7）年には、佐竹氏は木田余城を攻撃し、翌年には土浦近辺を侵略している。こうして佐竹氏の勢力が当地にも及ぶようになり、手野城周辺の小田氏配下の城も、1573（天正元）年に戸崎城、宍倉城、1578（天正6）年に木田余城が落城している<sup>12)</sup>。当地を巡る歴史的な環境から考察すると、佐竹氏の南下政策が著しくなる16世紀後半に、小田氏又は家臣の中根氏によって当遺構は構築されたと考えられる。しかしながら、手野城に伴う施設という想定のもとに考察した結果であり、時期については今後の調査事例の増加を待って再検討したい。

第1号堀跡とほぼ平行して確認できた第1号溝跡も、規模や形状、走行方向から第1号堀跡とあまり時期差はなく、手野城に伴う城郭関連施設と考えられる。堀跡の西側に土塁が伴うことを想定すれば、同時期に存在したとは考えにくい。また、中央部に土橋があり、木戸にあたる施設を想定したが、ピットなど痕跡は確認することはできなかった。溝の埋没後に第1号道路跡が構築されており、調査区の南側に現存する道標には、天明元年（1781年）の銘がある。当地は中世以降、近世に至っても交通の要所であったことがうかがえる。

#### 註

- 1) 関口満・黒澤春彦・駒澤悦郎『三夜原東遺跡 新堀東遺跡 壺杯清水西遺跡 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1』土浦市教育委員会 1997年3月
- 2) a 平石尚和「一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 下郷古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第167集 2000年3月  
b 関口満・窪田恵一『下郷遺跡・下郷古墳群 佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』2001年7月
- 3) 小竹茂美・浦和敏郎「戸崎中山遺跡 霞ヶ浦環境センター（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第218集 2004年3月
- 4) 関口満・福田礼子・吉澤悟・窪田恵一『前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）・東原観音塚 田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書4』土浦市教育委員会 1998年3月
- 5) 註1)に同じ
- 6) 大竹房雄「戦国土塁」『阿見町史』阿見町 1983年3月



- 7) 大関武「二重堀遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第297集 2008年3月  
大関氏はまとめの中で土塁と堀跡について、慶長5年の徳川家康による上杉討伐に対する備えとして、上杉氏と同盟を結んでいた佐竹氏が構築した可能性があることを指摘している。
- 8) 芳賀友博・須賀川正一・杉澤季展「小幡城跡 前新堀遺跡 諏訪山塚群 藤山塚 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第314集 2009年3月
- 9) 小川町史編さん委員会『小川町史 上巻』小川町 1982年3月
- 10) 石崎勝三郎「鹿行の堀切状遺構と新堀・大堀地名」『図説 茨城の城郭』国書刊行会 2006年8月
- 11) 石崎勝三郎「地名の向こうに遺構が見えた」『茨城県考古学協会誌』第19号 2007年5月
- 12) 土浦市史編さん委員会『土浦市史』土浦市史刊行会 1975年11月

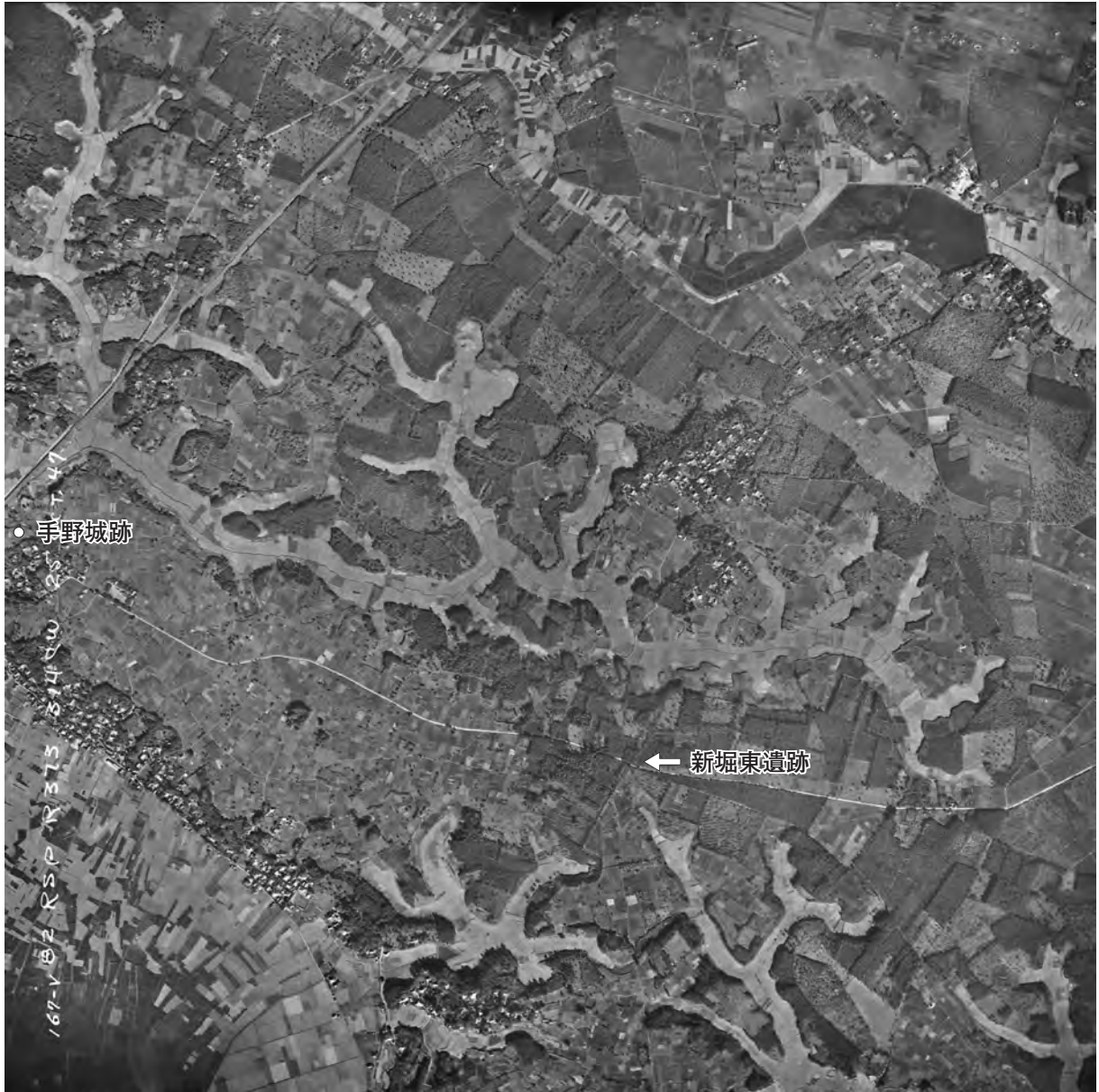
参考文献

- 茂木雅博編『土浦の遺跡 -埋蔵文化財包蔵地-』土浦市教育委員会 1984年3月  
土浦市史編さん委員会『図説 土浦の歴史』土浦市教育委員会 1991年3月



第15図 新堀東遺跡，手野城跡位置図（明治17年測量 迅速測図 国土地理院所蔵一部加筆）





第 16 図 新堀東遺跡，手野城跡周辺航空写真（昭和 22 年米軍撮影 国土地理院所蔵一部加筆）

写 真 图 版



調査区全景（南東側上空から）



第1号掘跡，第1号溝跡完掘状況



PL2



調 査 前 現 況



第 1 号 住 居 跡  
完 掘 状 況



第 1 号 堀 跡  
完 掘 状 況

第 1 号 沟 迹  
完 掘 状 况



第 1 号 道 路 迹  
第 2 期 路 面  
完 掘 状 况



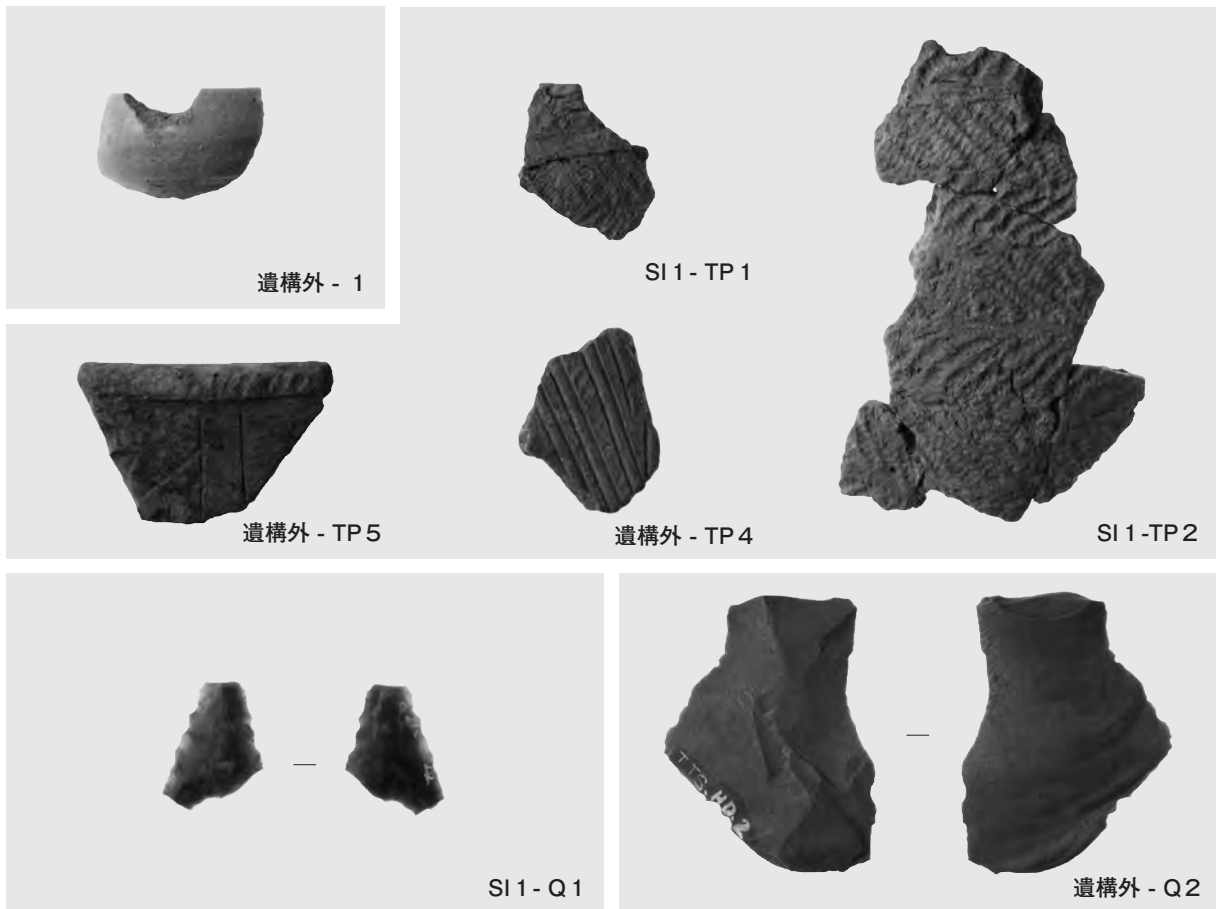
第 1 号 道 路 迹  
第 5 期 路 面  
完 掘 状 况







道標確認状況



第 1 号住居跡・遺構外出土土器，石器（鏃・剥片）

# 抄 録

ふりがな	しんぼりひがしいせき							
書名	新堀東遺跡							
副書名	一般国道354号土浦バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第358集							
著者名	小川貴行							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
新堀東遺跡	茨城県土浦市手野町字新堀3997番地の3ほか	08203 - 336	36度 05分 47秒	140度 14分 26秒	25 ~ 26 m	20100401 ~ 20100531	937 m <sup>2</sup>	一般国道354号土浦バイパス整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新堀東遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 1軒		縄文土器, 石器(鏃)			
	城郭関連施設	中世・近世	堀跡 1条 溝跡 1条 道路跡 2条					
	その他	時期不明			陶器, 瓦			
要約	当遺跡は、縄文時代前期の集落跡、中世の城郭関連施設であることが明らかになった。調査区中央には並行する薬研状の堀跡と溝跡が確認されており、規模や形状、立地から舌状台地先端部に位置する中世の城館、手野城の防御施設と考えられる。							



## 印刷仕様

編集 OS Microsoft Windows 7  
Home Premium ServicePack1  
編集 Adobe InDesign CS5  
図版作成 Adobe Illustrator CS5  
写真調整 Adobe Photoshop CS5  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
図面類 EPSON ES-10000G  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第358集

### 新堀東遺跡

一般国道354号土浦バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24（2012）年 3月14日 印刷

平成24（2012）年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社

〒319-1112 那珂郡東海村村松3115-3

TEL 029-282-0370